

2018 FIFAワールドカップ ロシアに 英国代表チームは存在しない

ロシアでは6月14日から、2018FIFAワールドカップ(W杯)が開催される。32チームが参加し、試合は、11都市の12のスタジアムで行われ、移動時間を軽減するため、全試合がロシアのヨーロッパ側の地域内とその近辺で開催される。



ワールドカップ開幕戦は、現地時間で2018年6月14日火曜日18時00分(日本時間24時00分)にキックオフされる。開催国ロシアの対戦相手は、グループAの「A2」スロットの抽選で選ばれ、開催地は決勝も行われる「ルジニキ・スタジアム」。大会最終日は、7月15日の日曜日。決勝戦のキックオフはモスクワ時間で18時00分(英国夏時間で24時00分)。同日、決勝戦に先立って3位決定戦が行われ、準決勝2試合は、7月10日と11日に開催される。本大会最後の4試合は、モスクワの「ルジニキ・スタジアム」か、サンクトペテルブルクの「クレストフスキー・スタジアム」で行われる。

2022年大会は、物議をかもしながらも、カタールで開催されることが決定した。現地の気候に配慮して、史上初めて、夏に当たる期間でない時期に行われることになる。

その後、ワールドカップは(多くのファンの反対にもかかわらず)出場チーム数が拡大され、48チームで争われることになる。2026年には、史上初めてアメリカ、カナダ、メキシコの3ヶ国にまたがっての開催になりそうだ。

イギリス=英国=グレートブリテンですが、一つの国としての参加をせずに、英国を構成する4つの地域、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドで個別に参加しています。サッカーだけでなくラグビーも同様です。他国のような英国代表チームはないのです。

サッカー、ラグビーなどは英国発祥のスポーツで、FIFA結成以前から、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド(現在は北アイルランド、独立したアイルランドは新しくアイルランド共和国サッカー協会結成)の四つのサッカー協会が世界のサッカー界主導していたので、国別でなく地域協会別で参加できるようになりました。

例えば中国も中華人民共和国、中華(民国)台北、中国香港、中国マカオが参加しています。

イギリスも4カ国からなる連合国家であって、それぞれの地域がひとつの「国」です。これは歴史的にも認められていますし、他国もそれを尊重しています。そしてアメリカと同様に連邦政府がイギリスを代表した外交政策などを行います。そのため、諸外国から見れば「イギリス」として知られている地域全体が1カ国のようにみえるのです。

イギリスを構成する4つの地域

イギリス代表ではなく、イングランド代表

イギリスはサッカーやラグビーの発祥の国として有名であるが、それらの競技にイギリス代表チームというものは存在しない。サッカーやラグビーのワールドカップに出場するのは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドという、「連合王国」イギリスを構成する4地域の代表チームである。これら4地域はもともと民族的にも文化的にも異なり、連合王国を構成するようになってからも独立意識が強い。とくにスコットランドは議会が立法権と課税権を有しており、独立国に近い存在である。そのような国内事情と、サッカー・ラグビーの発祥国であることを考慮して、イギリスにだけ地域ごとに代表チームをつくる特権が与えられているのである。



イングランド

イギリスの中心をなす地域だが、同時にイギリスの国名(英語)でもある。中世初期にゲルマン系のアングロ=サクソン七王国が成立し、10世紀に統一。イングランド王国となる。

スコットランド

7世紀以降ケルト系スコット人による国家が形成される。1707年にイングランドと合同し、以後イギリスの一部となる。宗教はプロテスタントの長老派が中心。

ウェールズ

1536年イングランド王国に併合される。

現在もケルト系住民が多く、英語とともにウェールズ語が使われている。

北アイルランド

1922年のアイルランド自由国(現アイルランド共和国)成立の際、プロテスタントの多かった北部6州がイギリスに残る。その後、現在にいたるまでプロテスタントとカトリックの抗争が続く。

アイルランド共和国

住民はケルト系。宗教はカトリック。長い反英独立運動ののち、1922年に北アイルランドを除いて自治権獲得。1949年に独立達成。